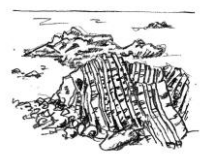


ビキニ被災支援 ニュース

室戸の会

2022年9月15日 No.47

発行 ビキニ被災を支援する室戸の会 太平洋核被災支援センター
連絡先 事務局 宿毛市 088-066-1763(山下) 室戸の会 0887-35-8725(濱田)



9/12・13 と浦賀・三浦三崎を訪問しました

9月12日、13日と浦賀・三浦三崎を尋ねた。目的の一つは「室戸岬船員同志会」の当時のことをご存じの方に話を聞くということ。二つ目は三浦三崎の船員組合の機関誌「スタンバイ」を見に行くということでした。

「遠洋」のNo.65(1960年8月1日発行)は、第15回定期大会の報告が特集されています。その中に「新役員の顔ぶれ」と「書記部の陣容」が紹介されていました。浦賀事務所には、会長・中谷清明、以下副会長6名、監事9名。書記部には、生産部門に4名、組織部門4名、業務部門に14名。室戸岬事務所には組織部1名、厚生部1名、販売部5名が紹介されています。今回、お会いしようとしているのは浦賀事務所の業務部門でタイピストをされていた柳井揚子さんです。

柳井揚子さんにお話を聞いて

12日10時に浦賀駅で柳井さんとお会いすることが出来ました。事前に高知市にお住いの岡崎さん(元船員同志会に勤務)に連絡を取ってもらって、お会いできることとなっていました。初めてお会いするのだけれど、「遠洋」を持っていたら声を掛けてくれるのではないかと思っていると、声を掛けてくださいました。心の中で「やったー」です。

柳井さんは昭和35年(1960)～昭和38年まで船員同志会の浦賀出張所でタイピストとして働いていた方です。もともと「日本ヒコーキ」という会社で働いていたのだけれど、そこが倒産しタイピストを養成する学校に行ったり、通信教育で速記の勉強をされたりしていたということです。そういう時に室戸岬船員同志会を紹介されて、そこに就職したのだそうです。「遠洋」という機関誌も見てもらいました。当時は大鳥さんが機関誌の担当で全体を取り仕切って、その大鳥さんのもとで仕事をしていたということでした。いろいろと教えてもらったと、懐かしそうに話

してくださいました。紙面にあるカットも大鳥さんが書いたりしていたそうです。事務所には7～8人は常時いて、生協もあったのでそこにも5～6人いたのではないかと当時を思い出してくださいました。会長の中谷さんは、いろんなところで名前が出てくるし、バリバリ仕事をされていた印象なのだという話をする、もちろんそうだけとても温かな方だったということでした。当時、事務所で全体を取り仕切っていたのは山村庄資さんという方だったということでした。柳井さんは、2年余り働いた後、旧国鉄の組合の方に転職されたということでした。

当時の役員の方で熊野一貫さんが近くにお住まいということで、柳井さんに



浦賀駅

案内していただき訪ねていきました。熊野さんのお宅は浦賀駅から歩いて 10 分ほどの高台の住宅地にお住まいです。熊野さんは、私が同志会のことを調べ

熊野一貫さんにお話を聞いて

熊野さんは昭和 2 年(1927)生まれだということだったがとってもお元気で、一人暮らしをされているということでした。以下、お話の概略です。

津呂の尋常小学校を卒業した後、国民練成大会に出場し水泳で優勝された経験を持っている。海軍志願兵となり長崎県大村にある震洋隊に配属になった。幸い出撃することなく帰ってくる事が出来た。室戸岬に帰ってくると、「日魯漁業」のマグロ船が船員を探しているという話を聞き、浦賀に来た。ビキニの時は第 3 万寿丸に乗っていて、ミッドウェーあたりで操業していたのではないかと、船長の福島信繁さんが、ビキニのあたりで原爆の実験があったらしいと無線が入ったので迂回して帰ってきた記憶がある。浦賀で検査したが、幸い反応はなかったという。その年の 8 月には大土佐丸に乗って出漁したが、放射能のことなどはあまり気にしていなかったように思う。

その後昭和 37 年頃だと思うが、大勝丸の船長になって出たときにソロモン海域で大きな台風に遭遇した。シーアンカーをつくって、シーアンカーに対して船首を 30 度の角度を保って、エンジンはスロー、ゴウーエイ、で何とかしのいだ。波は船の上の方に山のようになっていたから、なかなか恐ろしかった。何とかやり過ごした後、一人の若い船員が包丁を研いでいた。どうしたかという、「こんなところに連れてきて、船長を刺す」といってすごんできた。こっちもモリをもって、やれるならやってみろ、お前ら何にもわからないままで、海をさまよって、帰ることはできないぞ、と言ったら何も言ってこなかった。その頃は、船主が横須賀あたりの愚連隊のような者に声をかけて、船員の頭数をようやく確保していたので、いろんな

人の中で、ある方のホームページにお名前が登場していて、そこで知ってはいましたが、まさかお会いできるとは思っておらず、柳井さんに感謝です。

人が乗ってきていた。この台風で遭難した船もあったと聞いた。

その後家族のこともあり船を下りることにした。その時に中谷会長に声を掛けられて同志会の漁労部の仕事をするようになった。2 年くらいやったかなあ。同志会では柳井さんが先輩だ。当時は船主組合の事務所も近くにあって、孝栄丸の中野利信さんがよく差し入れを持ってきてくれた。

今回、お二人にお話を伺ったことは、時期的には昭和 35 年(1960)以降の様子を中心でした。その頃は、マグロ船もどんどん大型化して、漁場も拡大させていくときでもありました。当時の船員事情などについても新たな発見でした。同志会では、そういう船員問題や船の遭難の問題にもその解決にずいぶんと力を注いでいたようです。これらのことには船主組合とも協力し合いながら取り組んでいたことも「遠洋」からはうかがうことが出来ます。たまたま、持参していた「遠洋」65 号には「学習の頁」として「シーアンカーの栞」が 9 ページを割いて特集されていました。浦賀、横須賀には室戸出身の方が結構いて、かつては「室戸会」というのも時々やって、結構集まっていたそうです。そんな話の中で、西村拓郎さんという当時会計を担当していた方がいるという話になり、紹介してもらいました。



熊野さん宅にて濱田、柳井さん、熊野さん

どうしてこの名前に？「スタンバイ」は直訳すると「待機信号」。他には「頼みになる人」「味方」「とっておきの」という意味もあるそうです。(創刊号より)

機関誌「スタンバイ」

柳井さんと熊野さんにお礼を言い、お別れした後、午後は三浦市役所を尋ねました。

三浦市役所には三崎船員組合の発行していた機関誌「スタンバイ」が保存されています。事前に連絡していたので、文化スポーツ課の坐古(坐、左の人は口です。すみません)さんが準備してくださって、閲覧させてもらいました。「スタンバイ」は昭和 38 年(1963)に創刊され昭和 47 年まで 18 号が発刊されています。

三浦三崎は地理的にも恵まれ昭和初期からはマグロ類の水揚げで全国有数の遠洋漁業の基地として知られています。三崎船員組合も、その意味では早くから活動していたのだらうと思います。1962 年の機関誌には「昨年第 16 回定期大会」という記述がありますので、戦後まもなく結成されていたことが想像されます。組合員は 1964 年には 8000 人という記述を見ることが出来ます。スタンバイの創刊は 1963 年 2 月 25 日となっています(創刊号奥付)。「スタンバイ」について組合長の浅井繁春さんは、「機関誌スタンバイ『スタンバイ』を創刊するにあたり」の中で「組合

は組合員各位が示す深い理解の昂まりと急激な組織増加、今次大会の決定に伴う財政の確立、組織力の充実強化を背景に協力にして有効な運動の前進を測り、精力的な戦いを進めなくてはならない」として、組合員の団結と成長を訴え、その一つの役割として機関誌「スタンバイ」の必要性を訴えています。また、「海員組合の立派な機関誌『海員』や、室戸岬船員同志会の分厚い『遠洋』を手にした組合員から、三崎の組合ではどうして、このような機関誌が出来ないかとよく聞かれる」(「機関誌『スタンバイ』が生まれるまで」)をみると、船員組合同士の横のつながりもあり、「遠洋」知られていたのだと思い、うれしい思いがしました。

この「スタンバイ」は「ビキニ事件三浦の記録」(1996.3.1 三浦市)の執筆をされた森田喜一さんたちが三浦市に寄贈されたものです。機会があれば、再度訪ねていろいろと調べてみたいと思っています。



西村拓郎さんを訪ねました

翌日(9/13)に西村拓郎さんを尋ねました。西村さんは幡多の出身ということですが、マグロ船の船員ではなく、そもそも船員同志会に事務職として仕事をされていた方です。どのようないきさつかお尋ねしたところ、なんと昨日閲覧した「スタンバイ」を発行していた三崎船員組合の組合長の浅井繁春さんが自身の叔父にあたり、その浅井さんに同志会を紹介してもらったということでした。以下、お話していただいた概略を紹介します。

○当時の様子を教えてください

- ・こちらに来て 60 年くらいになる。ビキニ水爆事件があった後になりますね。

- ・総会は室戸岬でやっていたので、役員はみんなで行きましたよ。活動の中心は浦賀ですが。
- ・同志会は浦賀に大きなビルを建てた。生協と診療所、宿泊施設もある総合的なものを建てたのです。とても注目された。漁船労協の組合からは注目されて、いろいろと視察に来ていました。
- ・漁船労協の活動は中谷さんとか浅井さんとかが一生懸命やっていた。三崎は船主さんも大きかったので、組合の運動も活発だったので、同志会もいろいろ参考にしていた。
- ・浦賀は、室戸の漁船の基地があるということで栄えていた。出航するときにはいろんな人が来て見送

っていた。もともと、漁業はなかった。東京の水揚げの待機場所のような場所だった。その後焼津に移っていった。

- ・23歳頃にこちらに来た。30年くらい務めたと思う。
- ・大鳥さんは覚えています。小松社由(たかよし)さんも覚えている。のちに市議員になられて。
- ・船が入れば、すぐ横須賀にのみに行くという感じだった。誘われてよく行った。
- ・生協もいろいろ扱っていた。
- ・輪番制で宿直も良くやりましたよ。事故などの対応をする必要もあったので。

○財政的にはどのような状況でしたか

- ・補助金も出ていた。ビルを建てたのは借金は借金だったと思います。・金融機関は労働金庫が中心でした。

○中谷さんについて

- ・保険料を納めていないという問題などは大変で、結構船主さんのところに掛け合いに行っていたと思う。
- ・組合活動も活発な時代だったのではないかな。
- ・水揚げをしてから給料を決めていた。大仲制度だった。安定した賃金の確保というのは船員の要求だったのでしょうか。大仲制度というのは船の世界だけでしょう。
- ・近くに事務所がありました。船主の方も同志会の事務所にはよく来ていた。私もいろいろと会合には出ていた。組織的には山村庄資さんが仕切っていた。中谷さんは温厚な会長さんだった。

○このころは核実験が頻繁に行われていたと思うのですが

- ・そういうことについてはあまり記憶がないですね。ただ取材には来たかもしれないし、記者が船に乗り込んだということは何か記憶がありますね。

○高知の方には

- ・帰らないねー。こっちに60年いるから、地域のことはいろいろお世話している。町内会長もしていた。室戸の人もいました。
- ・室戸会というのがあって私も参加したことがあった。活発にやってましたよ。機関誌も出していたのではないかな。立派な方も結構いました。東京で会社をやったりとかね。

○「遠洋」74号の表紙の写真を見て

- ・この方は会計の青木君。この女性は、生協で働いていた人ですね。柳井さん。青木さんなんかは組合に最後まで残っていました。

- ・お話をしていて当時をだいぶん思い出しましたよ。

- ・大黒さんという人もいたな。奥さんが住んでいますね。その大黒さんが会計の責任者だったと思います。

○もし、いろいろ情報があれば、教えてください。ありがとうございました。



10月お茶会(お昼会)で楽しいひと時を

日時 2022年(令和4)10月22日 11時~13時

内容 11時~近況おしゃべり 情報交換 室戸の会の活動計画 等
12時~昼食会 ※お弁当用意します(600円~800円)

場所 ニューサンパレス室戸

主催 ビキニ被災支援室戸の会

連絡 濱田郁夫(080-5442-4588)

5月の企画ご協力ありがとうございました。久々の集まりです。近況などお話ししながら昼食会をしませんか。

